



石の俗称辞典 -面白い雲根志の世界-

加藤碩一・遠藤祐二 共編著

愛智出版

A5版, 312ページ

定価5,400円(税抜)

アウトドアの散策中に、岩石の作り出す思いがけない造形に驚かされたことはありませんか? 日本人はとかく花鳥風月の世界に向かいやすいといわれますが、どうして、先人は石やその作り出す地形をも驚きをもって迎え、いろいろな名前やいわれを与え、しかと記憶にとどめてきました。「石の俗称辞典」は、日本全国に散らばり、開発や山村の荒廃とともに忘れられようとしている「石」の名前や、石にちなむ言いつたえなどを、大きな項目で1500以上の多きにわたってまとめた本です。「辞典」との本題が示すように、記述は辞典のスタイルでなされていますが、内容は「烏帽子岩」、「獅子岩」など石による微地形の解説や、自然石についてのいわれなど、副題の「雲根志の世界」にふさわしい石の民俗誌といえる、読んで面白い本です。古典的なものも含めた石材名の解説が多く、実用的辞典として役に立つことは言うまでもありません。また、廃語になりつつある鉱石名や鉱山業に関する言葉を多数収集した、科学史の上で意味のある書物とも言えるでしょう。このように、本書は石や民俗にかかわり関心を持つ、幅広い分野の方々にお勧めしたい本です。惜しむらくは、写真など具体的な「石の形」を示すページがほとんど無いことです。この点については、写真集など本書を補完する出版がなされることを期待します。なお、巻末に、地質時代や岩石の分類と定義等についての補図と、全国の地質系博物館の一覧があります。

(地質標本館 奥山康子)

東海沖の海底活断層

東海沖海底活断層研究会編,

東大出版会

本文151ページ, 口絵14ページ,

付図5葉, 定価28,000円(税抜)

東京大学出版会からは、日本全体の活断層情報を網羅した「日本の活断層図」(1980年)、「新編日本の活断層」(1991年)が出版されていて、活断層研究のためだけでなく、防災関係者などに広く活用されている。本書もタイトルだけ見ると、東海沖海域の活断層情報を集めた印刷物という印象を持ってしまいが、実際には、海域活断層の調査方法・評価方法の解説から、この海域のテクトニクスのみと、オリジナルなデータの解釈とそれに基づいたモデルの提案までを含む総合的な著書である。

「1. 海底活断層」では海底地形及び地質に関する最新の調査手法が、かなりの紙面を割いて解説されている。調査機器の原理、得られるデータの解析方法、さらに海底活断層の判定評価基準まで詳細に言及されている。特に90年代には、海底地形及び地質の調査技術が大きく進歩し、それらのデータの解析方法も大きく発展したことから、最新の総合的な解説書が望まれていたところである。

「2. 東海沖のテクトニクス」では海底地形、地質構造、層序、地殻熱流量、重力・地磁気異常、地震テクトニクスについての解説があって、この海域の地質学的、地球物理学的背景がよく理解できる。

「3. 東海沖の海底活断層」で主題の活断層の分布が、大陸斜面から南海トラフ、銭洲海嶺までの範囲について、9頁の20万分の1海底地形図に詳細に示されており、さらに一つ一つの断層の規模、変位基準、確実度、活動度などが一覧表としてまとめられている。またこの章の特徴は、断層の構造を

直接読者に見せるために、多くの反射法地震探査断面が示されていることである。日本周辺海域の質の高い海底地殻断面がこれほど多くまとまって印刷されている例はないであろう。単にこの海域の海底地殻断面を見るためだけでなく、海底の地質構造がどのように見えるのか、それをどのように解釈するのかを考え、説明するための格好の資料であり教材としても価値が高い。

基となったデータは、日仏KAIKO-Tokai計画で得られたものを中心とするが、今まで各機関によって得られたデータも含んでいる。世界でも最高水準の海洋調査機器を所有するフランスとの共同研究によって、東海沖海域は世界でも最もよく調査された沈み込み帯の一つとなったが、ここではその全容がまとめられている。

最後の「4. まとめと今後の問題点」では、本書で提案された海底活断層の評価基準があらためて示されるとともに、その限界を明確にした上で、今後必要な調査まで言及されている。

また、20万分の1海底地形図・音響画像図・海底活断層図、40万分の1地磁気・重力・熱構造図などのカラー印刷された付図、或いは口絵に納められた潜水調査によって撮影された海底の写真などによって、様々なスケールで本海域の地形・地質・地球物理学的特長が理解できるように工夫さ

れている。

このような盛りだくさんの内容を含む本書は、研究者だけでなく、この分野に関心のある人たちにとって価値の高いものである。要望として、解説とレビューではもう少し参考文献を充実して欲しかったし、最新の研究成果、オリジナルな解釈及びモデルは、今後、議論を充実させて論文として発表してもらいたい。また、生の反射法地震探査断面を数多く公表しているところは高く評価できるが、そこに示される断層の判定基準がやや不明確で、今後、反射法地震探査断面の解釈方法について議論や理解が深まることを望む。

南海トラフや日本海溝などの沈み込み境界に発生する大地震は、プレート境界の逆断層が破壊するために発生すると考えられてきたが、沈み込み境界を詳細に調べると、プレート境界の逆断層だけではなく、多様な変形が生じていることが本書で明らかにされた。一方、南海トラフで生じるプレート境界型の地震は周期的に発生するが、それぞれの地震の規模や起こり方にはばらつきがあることが知られている。本書では、地質構造の多様性が地震のばらつきの原因である可能性を指摘しており、本書を通じて地質学と地震学のさらなる交流と議論が進み、研究が発展することを期待したい。

(海洋地質部 岡村行信)